

既存の建築スタイルの枠を超え、時代に適合した新しい和の家。 斬新な工夫を凝らしながら、暮らしやすく快適な住環境を実現。



外壁は厚さ12ミリのサイディング。玄関まわりは茶色のジョリパット塗装に、木の素材を生かした飾り柱や梁が存在感を高めています

生活の利便性を確保し
和へのこだわりも追求

現在、Beハウスの展示場として公開中の安友邸。2×4構造のオール電化住宅で、エコキチ、IHクッキングヒーター、各室独立型の換気システム、雨水利用の貯水タンクなど数々の先進設備を取り入れる一方、和のなごみが随所に感じられ、見学に訪れる皆さんにも好印象を博しています。

「料理や食器、家具や調度品など、ちょうど生活全般で好みが和風に傾いていました。でも純和風の造りは費用がかさむだろうし、今の生活スタイルにもそぐわない。ならば現代の機能的な住宅の中に、できるだけ和の良さを生かしてみたい」と思いましたと、ご主人。

内装は、洋室と和室のパラメスを考え、統一感が出るように、白と茶色を基調としたシンプルでデザイン。窓は全室ともサッシの内側に障子戸を入れ、柔らかな透過光が室内を明るく照らしています。障子紙はアクリルシートをベースにしたワロン紙。丈夫でしなやか、水にも強いため掃除が簡単で、張り替えなどの手間も不要。京都の大きなお寺でも、これを採用しているところが多いそうです。

15帖のダイニングキッチンの一隅にある3畳の小上がりは、お年寄りでも腰掛けやすく、立ち上がるのにも苦勞しないという37cmの高さ。和紙素材の畳表は、いぐさに似た感触を持ちながら、色があせたりカビが生えることもなく長持ちします。床と小上がりの両方にまたがる2mの長いテーブルは、畳の方へ引き寄せれば床面を広く使え、逆に床側へ動かせばイスを多く置いて大勢で座れます。

メリハリを効かせて 予算配分も要望通りに

1階の和室は、珪藻土の壁に白木の造作材がマッチした明るい雰囲気。照明は、高さを生かすため天井に埋め込み式の蛍光灯を据え、小さな障子で覆いました。障子を天井より少し下げて吊すことで、照り返しの光が天井に漏れ、間接照明の効果も生まれるのです。

2階にある9帖の仏間は、壁は珪藻土の山波仕上げ。屋根の勾配を利用した船底天井には、やはり障子の照明効果が。昼はトップライトからの光が、夜は蛍光灯の明かりが、二重に張った障子紙を通して隅々にまで広がります。

仏間の入口にある洗面台のボウルは、「イタリヤ製の素焼きの植木鉢を自分で加工しました」とご主人。下地材を塗り、サンドペーパーで研ぎをかけて景色を出し、カシュー塗料に摺り漆の技法を使ってツヤ消しに仕上げました。材料費は



(左)ダイニングキッチン。手作りの木のテーブルが小上がりと床面を橋渡しし、状況に合わせて幅広い使い方が可能です。(右)仏間。天井にも障子紙を一面に張りました。仏壇が安置される背後の壁は金襴クロスです

わずか数百円ですが、まるで陶芸家の一点物のようです。

手作りを楽しみながら 多彩なアイデアを形に

安友さんがBeハウスに依頼したのは、過去の施工例を見学し、デザインの良さに納得したため。また、Beハウスグループの代表でもある飯田高社長ともじっくりと話をし、同グループが発行している小冊子「本当の『原価』で家を建てる方法」を読んで、その内容に誠実さを感じていたそうです。

「普通の建築会社では、仕様があらかじめ何段階かに決まっています。坪単価の安いものを選ぶと全体のグレードが下がってしましますが、Beハウスは対応がフレキシブル。大事な部分には重点的に費用をかけられ、しかも良い材料を原価で提供してくれるので、ほかの部分にも予算以上のものが入れられました。あらゆる意味で自分のこだわりが反映され、要望通りの家になったと思います」

気になるお値段は、これだけの機能と設備を整え、施工面積49坪で1,680万円(税込)。後から、ほかのメーカーで家を建てた人の話を聞き、さまざまなか点で違いを再認識したというご主人。「デザイナーとつくる家」の良さとはこういうことなのかと、感慨を新たにしたそうです。

(取材/池田充雄)



(左)玄関ホール。吹き抜けの天井から和紙のライトが下がり、障子窓とともに和の要素が感じられます。(右上)ご主人の安友 純さん。(右下)洗面台はご主人の力作。仏間に入る前にここで手を清めます



Beハウス

— デザイナーとつくる家 —

<http://www.behouse.jp/>

■建物面積 161.98㎡(49.00坪)